



大鏡

臺

增4
775
90



1曾
775
90

大鏡卷之一目錄



五十五 文德天皇

五十七 陽成院

五十九 宇多院

六十一 朱雀院

六十三 冷泉院

六十五 花山院

五十六 清和天皇

五十八 光孝天皇

六十 醍醐天皇

六十二 村上天皇

六十四 圓融院

六十六 一條院



大正二年一月廿日寄
中村猶雄氏贈

六十七
三條院

六十八
後一條院

はい清一の雲林院のやうにわうは清くてつら
くときいの人よりあまよくせしむるをそげ
ふたされもよりをむるをそげふたされも
よおぬのりあまねおるやうなるものち
ねと見ゆるふれうらうらういふはけし
やう年あゆむるむし人よふめんてふ
世中の見ゆる事とていふあせんあ
今の入道教下はあつた海とていふ
ひよあつたはれくもあひやふれ今
あつたやすくよみちとていふ
あつたげふたうらうらうあつた

しきじうー此人きものいふまうーくちもはあめりか
ゆきくはひひいさゆりけあとなんえはるをきく
うまうーなる対面ーあかうねちてをいふ川小あ成
ゆひゆるとくつを今ひりりあきかいらつものよま
死よおんえゆーひきまーあまのねを改乃たま
貞徳公此義人少ねとーおらこのこまひうまうた
かぬ丸どーーはまき西村たぬの后のまはゆかのみ
はひひり名のあやけのよらどまうしひゆかーか
かぎれどぬーたみーあまのまはあまかーまうた
たてまうーんーあまのまうーあてあまー時
ゆき二十五六のたのこまうーまうーかまう

めきばよのどまうーくちゆりー申せはてまぬー
のこまひひひあまやまゆきまはたを改た后戻りて
元服はまうーあまのまうー申せはあまどーあま
せまうーかまのまうーあまのまうー申せはあま
まげまうーあまのまうーあまのまうーあまのま
ゆりまのまうーあまのまうーあまのまうーあまのま
見おこあわよまのまうーあまのまうーあまのま
ゆゆひひあまのまうーあまのまうーあまのま
あまのまうーあまのまうーあまのまうーあまのま
しきまのまうーあまのまうーあまのまうーあまのま
のまのまうーあまのまうーあまのまうーあまのま

いあはれおいらはさしをていつか女と様とあはれ
 りおいらはつゆりやまはるおいらはつゆりおいらはつゆり
 十二三もそうおねて入敷はまつい侍とてなまじ
 といひくちんてらまじいといひくちんてらまじい
 けの由あるいあはれおいらはつゆりおいらはつゆり
 とのいれど何とていふまじいおいらはつゆり
 ういひくとおいらはつゆりおいらはつゆり
 いきひくちんてらまじいといひくちんてらまじい
 うやみえまじいといひくちんてらまじい
 ちとゆりはつゆりおいらはつゆりおいらはつゆり
 そのいらあひりつゆりおいらはつゆりおいらはつゆり

せうまじいおいらはつゆりおいらはつゆり
 おいらはつゆりおいらはつゆり
 といひくちんてらまじいといひくちんてらまじい
 行いもえまじい侍はつゆりおいらはつゆり
 といひくちんてらまじいといひくちんてらまじい
 ぶくし海舟まつおいらはつゆりおいらはつゆり
 くおいらはつゆりおいらはつゆり
 いおいらはつゆりおいらはつゆり
 といひくちんてらまじいといひくちんてらまじい
 おいらはつゆりおいらはつゆり
 といひくちんてらまじいといひくちんてらまじい

また〜海軍のほのめき海軍とありふるど
 ういふの中は事なりと云はれり〜
 小うもなまのまは法苑経一部と云はれり
 ひとく〜
 をなすもてめ付教はひり〜
 入道教のほり〜
 よけり〜
 一〜
 なふばり〜
 ひは〜
 やき〜

の〜
 ち〜
 り〜
 び〜
 ぢ〜
 井〜
 け〜
 き〜
 て〜
 邦〜
 地〜
 う〜

より戸を思ふは徳と文徳天皇と申すは御門の
一御に記さるるやよりあるは今の御門を十代
代より御影を記さるるは御影を記さるるは
凡そ位は記さるるは嘉祥三年庚午築よりあり
一まてい一百七十六年はるるは御影を記さるる
けまてい一は記さるるは御影を記さるるは
あかしくありとも記さるるは御影を記さるるは

五十代

或本云
田邑帝也

文徳天皇と申すは御門を仁明天皇の御弟一皇
子ありといふかのみありは母は太皇太后藤原順子
と申すはその御弟大臣贈正二位太政大臣冬嗣のた
るは御影を記さるるは御影を記さるるは
よむまれば記さるるは御影を記さるるは
一の御影を記さるるは御影を記さるるは
八月御影を記さるるは御影を記さるるは
月御影を記さるるは御影を記さるるは
御影を記さるるは御影を記さるるは

月廿一日位よはつせはつし御年廿四とせとたりく
せはつる九年天安二成刀の紫八月廿七日より
うせはつひぬ治成廿二みきれたんをよあつし母乃后
十九よりういみりやとうん奉りつし嘉祥二年庚
午歳四月よ后よあつせはつし山氣字十三歌衛元年
甲戌皇后宮よあがりぬはつし貞観三年辛巳二月廿
九日御出家 藤原ササキ
同八年丙戌正月七日皇太后宮より何るおはつし
五条后より寸伊勢物語よ業平乃中將よひくご
とふらつと縁あんとよらんはつしはつし夫乃由事
乃后よあつしあつしはつしはつし二条の后より

かまひりしを考ふあひでれりとうりもはつしをよ
あつしをやむじくはつしと五条の后の由いれしはつし
あつしはつしはつしはつしはつしはつしはつしはつし
はつしはつしはつしはつしはつしはつしはつしはつし

五十六代 このらんしはつしはつしはつし

はつしはつしはつしはつしはつしはつしはつしはつし
文徳天皇乃中臣の由也中母明子 皇太后宮より 太政
大臣良房はつしはつしはつしはつしはつしはつしはつし
年庚午三月廿七日母乃中臣の由也中母明子はつしはつし
小一条のりしはつしはつしはつしはつしはつしはつしはつし

り日生れ終へんらんしういふおのゝこゝろかやう
よめをきりきんとおぼえ侍もあはれやうは子も
赤文あゝそひり終へんこの世のひとしを
ひめを屋敷に生れさせしる兼光十一月廿日東宮よ
から終ひて天安二年戊午八月廿七日由業九歳り
て位よ終へ終ふ也貞觀六年正月七日由業九歳り
胎也由業十歳あり世に終ふ也貞觀十八年十一月
廿九日深草院小きかりに終ふ元安四年元安五年正月八日由業
十月廿日終ふ也終ふ由業廿一
家なるも門乃おのしつと戸の由業急ぐりいまる
世よ深草の武者りぞういふも世をたのやあはれはあ
やうもはなれぬゆめふすもたはらるゝやう

きとまり終つて貞觀六年甲申正月七日皇后宮
よあがり終ぬきされの位よ甲十一年たうりまは次
深草の屋よりそれ時終持備よは智證大師り
おろし由業天安二年終ひのえらうの兼光七月廿七日終ふ也
あはれんはたむひらうもあはれり由業の
室はかゝりけりしういふ今生疑り天安
二年よ唐よりかへり終ひ

五十七代 この神門のつらうり
ありまはらうりあはれり

はらりんかゝ陽成天皇とすき神はあはれり
清和天皇の皇子ありは母皇太后文高子とす

き贈太政大臣長良のねむり此沖むれぬなりと云の
んらや貞観十年はらののえ祿十二月十六日深敷院
よそ生れ給へり同十二年はらののうら二月一日
二歳よそ東宮よそせ給ひて同十八年丙申十月十一日
よ信よはるせ給ふ西暦九歳元号六年壬寅正月二日以元
服冲兼十五世と云く後給ふ事八年元号八年二月四日おきを西暦六
百七十七帝院よおりししひつを
のせ給ふて西暦五年あことし西暦二年九月廿
九日よそ生れ給ふ西暦事此朝文よ秋迦出来乃一年のこ
のうらよははるし給ふるなりちあふく思ひより宮ん
やどいけりあこと佛の冲兼よりを西暦をり
しやりの此後世のせ免ふかんを給ふてそ人

の養よんくも色冲母后清和乃西門よとは九年の
西あひたりと廿七や戸ししこの陽成院と云う
んまをまつりたふあり元号元年正月は元はたり
キキふ中宮と申給へり廿六同六年壬寅正月七日
皇太后元よありとなふ冲母し西暦五年のきさ記
のよやばるしそあ給ひたりやうこそ給つかけん
いよごよごのあそをたしけふささい中將乃
あひびくぬてかきしなごまつりきりきり後治
せうとのあそり基經大臣國經大納言なんどのと
くねらしきんねよの事あるもんしりりう
しふおしきまのけふたりはまもありのまらち我

もあぢねいしよんねひんぼんちの由事一あまじぶ
を急乃よ小祚代のひもやうしんくもあまじぶ
あまはよのつひの由一づまうとあぢうん一うん
らまねさすやねう一ゆきんとあぢえゆかり
らまねは中一はく傑敵のまよあひかひあま
一ねひんぼの事とやまうま一はひりるね
なまねあま一うまねのまうしんくもあまじぶ
しけなまじゆねまごらまはあぢ人のあまじぶ
まがしとねまはあぢあま一うまのまあま今伊勢
物語のまねまねまねあまじぶあまじぶあまじぶ
ぬ人のあま一ねまなまじぶ事とまのあまじぶひの程

と一まはらけねれま急乃せまごあまじぶあまひ
くねまあま一まあまあまじぶあまじぶ
く一あま一あまあままあま一まあまあま
あまのまあま一あまあまあまあまあま
あま一あまあま二あまあまあまあまあま
あま中將のまあま一あまあまあまあまあま
あまあまあまあま一あまあまあまあまあま

五十八代

はなまあまあまあまあまあまあまあまあま
仁明天皇のまあまの王子あまあまあまあま

隆子よりき贈太政大臣繼體大臣の御むじり免あり
は西門淳和^{しゅんわ}天皇の御時河天皇の年辛亥東六条殿の
てむまれ給ふ由おやのあり奉れんくむの御時兼和十
三年丙寅正月七日四品一給ふ沖兼十六嘉祥三年
庚午五月中勢卿一成給ふ由兼少仁壽九年辛未
十一月十一日之京よりのおむれ給ふ沖兼少二貞觀六
年甲申正月十六日上野大守かけを給ふ由兼世に
同八年丙戌正月十三日太宰帥一遷兼少由兼三十六
同十二年庚寅二月七日二品よのおむれ給ふ由兼四十年
年一上野大守同十八年丙申二月廿六日式部卿より
せ給ふ由兼四十六元兼少二壬子正月七日二品よの

ら給ふ由兼五十二同八年甲辰二月廿一日位一給ふ由兼
沖兼五十四世とありを給ふ由兼四年小松乃見より中を
おの由と記はあがりつがのうたの由つがひれくろとは
あききりりとききつがを由とくもや

或本は仁和三年八月廿六日
うせきせりし由と一五十六

五十九代

この是くともあつひらの中ねくすまひとう給ひてまひく
うりん由まきよらりあつむむんろとまきあ

川き給みよき享ふりえうとく申き小松乃見かとの由
この王子ありし由いんかゆとく沖母皇太后宮いんか
子よりき二品式部に贈一品太政大臣中野乃親王の由
女よりおのみよと貞觀八年丙戌五月廿日生れし由ふ

元孝八年甲辰四月十二日からついでにのふたゝも終ふ
沖藏十九王をうなむきあえとく敏上人をたかり
ゆきを新河殿と乃こいつにたすくおとあるゆゑ此中お
とすまひさう終ひけふはぶこいつよりちうけ
らきてかうらんおまふたりそのおれのいままふ終ひを
仁和二年戊申八月廿六日末文をきうせ終むと
同日位よはうせ終ふ忠藏廿とよとまう終ひ
事十年寛平元年終ら乃よとより十月廿一日つち
乃よのさう此日かを終新河殿新河殿けいさのふのゆと
よりおの終ひ右道清中将四年きんのくはつしうしん平院乃
終らあは事おの昌泰昌泰
元年ばらのえむ戸四月十日か終せ終ひ乃門

いまの位よはうせ終ら乃よりきあえ終十月廿六日の終
よかものゆとら終んよまら終らむあをびありき
けあようものゆとらんきとせん終ひあやう
はるんよゆらあさかをさうりまかまらつりまゆり
あゆらゆとくはまうかまらつり終らんと
たまんをそのゆとらゆとものゆとらんのおおせら
おとらゆとまら終ひくものゆとらゆとまらひら
おかやけまら終らゆとらゆとらゆとらゆと
ゆとせ終らゆとらゆとらゆとらゆとらゆと
ゆとせゆとらゆとらゆとらゆとらゆとらゆと
ゆとせゆとらゆとらゆとらゆとらゆとらゆと
ゆとせゆとらゆとらゆとらゆとらゆとらゆと

よら殿 活ひぬいづかり事よかしくんをせががりめ次
程よりく位はう綴るまうつたれをまんじりま
はのせき殿たまふ所よりかもの時神のまをん
してまつりせき殿 活ひくちり綴る百なり此日
くゆりたれまやぐそ 教月乃まそのよりの日 陰時
乃糸はゆらりりあまのあまびめまはらり
の紙活活よらんらるり

ちまやもたかむ乃殿 活のむめふ松

よりの世あともいりか

これと古今にりりてゆり人これきり綴る事
ちまじもいんじりよみ綴るふゆりか

きまはむりりり綴るまふかゆを急んくりり
いとかくやをれりりゆり位よゆりせ綴りて二
年とりふまけりまれり活ひのを中物年綱
活ひまはり活ひるま 寛平九年七月六日あり
き綴り活ふ昌泰三年活れとのりり十月十日
出家せき殿まふりり名あむがうりりりりりり
元年七月十九日せき殿活ひぬ西暦六千六百
のぞりきりりりりりりりりりりりりりり
けか入道まけのゆりりりりりりりりりりり
せき殿まふりりりりりりりりりりりりりり
まひののまふりりりりりりりりりりりりり

なみさかゆと次とせりりふあられの事うれ
おのえらふのきと人よかり給ふやどなむむむ
つるかーよくおねし給うはは母さう并む
の后より長野の親王を桓武天皇の血縁なり
二所見ふの陽成院の清和殿上人として神社者
仍奉まはまひ人などせき給給ふ位はは色給
初このち屋うけいおんととりてりきるけ
分はきうごら下人よあはあやあーくも
とを治くれさうおねせらるもはれ

六十代

いづか聖代 桓策年 小徳中
とそよあ中よりつこらあか

はぎのえかや醍醐天皇よりさいこれあつひと
是尊子太上天皇れ青一王子よたうーまは清母
贈皇太后宮温子とやき内大臣高友はたか勧修寺高友
このねとれは女ありとあのみやに和元年乙丑正月
十八日小生れ給ふ寛平元年三月のあうじ四月
二日東宮よ多岐給ふ清とー九氣同七年乙卯
正月十九日十一歳もて由元服又同九年丁丑七月三
日位よはら給給ふ由氣十三歳とてあまひよるはお
とごらとまら小由かうゆり奉つとさーつそた
さーゆーまらと老ふ清とづーわさ人乃中
冬内とーやゆとよとたりと給給ふり廿四年

この内氣どうしひかり朱雀院うじまれかり
ましたる内いり此をちか教よよいごとく改修し
あまじく中將和諤つらうまのまるとえたあめり
ひとも改よひひかきふか今よるは
もいそせまその月うけをうらて
せよむぞういりぬいそぞれいねえ
まきんかきけかきん
いもひはかあそぬあそぬいそせの
のちも改よせぬ月とさうえめ

西よりなるとん改修なりいそあまりいりかく
えんかきいりけり
延長八年九月廿五日かりを改修し
八月廿二日改修しみきき山あかきありのちり

山あかきいり時そり

六十一代 将門純友の事ハこの時

朱雀院天皇より中御いりれむのちいりこれた
のみかとの御十一の皇子なり中御皇后宮穩子
中御大政大臣基理たこのち改のむまめここの
えかき延長元年癸未三月廿日女官生れさせ改
同二年乙酉十月廿日東宮より改修し四歳三歳
同八年庚寅九月廿二日位を改修し四歳八歳
承平七年正月廿日元服四歳十五世とと多せ改
治承平十六年

治承平十六年八月十五日失
治承平十六年八月十五日失

八橋の元ん〜の祭ハハ世時よりつるさ〜ハ帝
 生れを移ひてハ神あ〜もま〜つ〜はぶる宣火と
 と〜して神姑の内よ〜と〜お母〜も
 よ〜せ移ひさ〜小野又〜中〜を移ひてかく
 けり〜花〜このみ〜生れかり〜お氏の
 さ〜い〜か〜と〜あり〜南〜い〜足打
 神〜生れを移り〜花〜位〜は〜せ移ひて後
 さ〜ら〜る〜れ〜い〜き〜心〜れ〜を〜と〜ぶ〜え〜信〜
 け〜ん〜の〜祭〜よ〜花〜の〜阿〜は〜ま〜阿〜を〜ハ〜の〜分〜は〜
 ゆ〜の〜の〜の〜と〜る〜あり〜
 松毛おひゆ〜と〜こ〜け〜ひ〜ん〜と〜あ

ね〜と〜来〜と〜致〜つ〜人〜ま〜は〜と〜せ

六十二代 天曆聖主此也殿上有和哥會

信ぎ乃え〜と〜む〜か〜は〜花〜天〜堂〜と〜申〜き〜出〜の〜家〜か〜や〜と
 あ〜ら〜う〜あ〜れ〜い〜これ〜み〜ふ〜乃〜十〜四〜王〜子〜也〜法〜母〜所〜生〜舊〜院
 乃直松あり〜り〜ふ〜お〜ら〜〜南〜と〜この〜み〜と〜延長四年丙
 戌六月二日む〜ま〜れ〜桂方坊か〜ら〜う〜ま〜れ〜と〜せ〜天〜堂
 二年庚子二月廿日信元朕冲策十五同七年甲辰四
 月廿日よふ〜あ〜〜と〜き〜後〜移〜ふ〜と〜〜十九同九年丙午
 四月廿九日信よ〜け〜を〜移〜ふ〜神〜策〜女〜一〜と〜飯〜を〜せ〜移〜ふ〜事〜廿
 一年ある年ハ康保四年五月廿五日を移す 神母辰延新二年癸亥

前坊生れを移す此年十九日女年ハナシニヤト女津宣旨くごら
移す此年廿六日女之年一乃とのいりぐ未権院む
まきを移す同日廿九日女乃宣旨かゆく世移す
二十九日をくみくうまの移すかかど一四月より
もきを移すひけらや早くと材よむまれを移す
ひかり屋よきを移す前坊乃出と紙文れうあふ
ゆりかりと中つふ今ありけふうの此世の
とこふたのめ大補乃きえといひ世移す房乃あき
てかきり世移す

よひぬきと今く物と取りくも
しつ病よふぬきをみくうりけき

又此法事けそく人くゆりりつふひくく
よまればりけき

いまはとくままぬい何ふほく
あつきのゆふかんとすむ

五月のりふ坊のきりげふつわくおがゆか
くを信れ事まをけりふらり乃く
ゆりかしてあままよをくれ奉りそ
まげを移す同日一未権院むまれを移す
まね屋よきを移すひらんそをよふか
うきま移すつりはくうまのまき
あれとや

六十二代

或本ニ
いふところにてえ方のちがひけしき

はぎのりえかろは冷泉院天皇よりこれのひら
き切りの見え天皇は二乃王子ありて母皇原宮女子也
尸す右大臣師補乃相とこれ第一のむすめ也このはつ
天曆四年庚戌五月廿四日薨乃相とこれいふは後位
下より傳ふありきことなるのりりありの五條は母も
あしこれより幾く経つて同年七月廿三日東宮より後
小應和三年癸亥二月廿八日元祿中崇十郎康保四年
丁卯五月廿日十八を位は後幾く経つて後
弘和三年寛弘八年辛亥十月廿四日沖兼六
よりこれかろは海よりすれと二系院位より名もふ

とて大嘗會ありてこのひら海とぞおのりり
よの人よりなる

六十四代

四融院寛和元年八月廿九日出家世七代名金剛法同二年
三月廿二日於東大寺受戒正曆二年二月十二日崩 年世二
同月十九日葬四融寺北原量石骨於村上陵傍

はぎのりみりや四融院天皇よりこれのひら
是れとろろろどろりや又王子也此母冷泉院乃同一版
よたより内もこれみり也天徳二年己未三月二日生
まをせたまふは此門乃東宮より幾く経つて後い
きくふくといふこときく事とて丁も傳ふかよまはこれ
人乃あつてしりたかろのれを事もかろしやめ

侍りぬ安和二年己巳八月十三日よそは位はを給
ひたれ御衆十一とそしゆく天禄三年壬申正月廿九
元服の衆十四より紙をもちて給ふる十五年^治愍ありて
此の家法はあんごうやうと申す正暦二年二月十二日
うせき給ひ給ふ御衆三十三母原の衆二十すをうらつ
けさあのみとく治承院と申すもその給ひり^{治承院の御衆}
つりうらつきのいそやびとくれき御衆と申すも其母がの
はほけり御衆守後五位下教原の侍りふとひひり人
を忽乃よりあはれうきと給ひ給ひとそし贈^ま之位と給
ひつりいそぬ給ひ給ひのよれ日うりははひとめい
あまうしれきいそと申すははははは女十文うし

なり給ふあびとくれき給ひ給ひと申すもその給ひり
うれとくうも給ひ給ひと申すも其母がの侍りふと
おんもたれり御衆と申すも其母がの侍りふと
をよりぬとそしと申すも其母がの侍りふと
かそのと申すも其母がの侍りふと

六十五代

諱師貞寛弘五年二月八日崩四十一

はさかみとて花山院天皇と申すも其母がの侍りふと
泉院一皇子の御衆と申すも其母がの侍りふと
大臣伊尹の御衆と申すも其母がの侍りふと
のえきと十月廿六日母とて此の家法は一条乃御衆

まをせんを珍ふとあるは世尊寺といふやまを白鳥
冷泉院出付の大尊會此はけいあると因二年己巳八月
廿一日承文りきりせ珍ふ清康二歳天元九年壬午
二月十九日元服せき珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ永観二年甲
申八月廿八日位よけりせ珍ふ清康十七寛和二年丙戌
六月廿二日親あさゆりきりせ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ
き珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ
入道せき珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ
ままふの二年之後女二年いたるゆきありあり
かり事たるとありゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
のゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

りいんどうありきりせ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ
ありきりせ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ
珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ
このおとありきりせ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ
はきりけりきりせ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ
承文の四方へありきりせ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ
珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ
とありきりせ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ
月れおありきりせ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ
月が出家成就ありきりせ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ
いそきりせ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ珍ふ

つらきことゆゑもなほしづゆ流しけりかとあや
めいづゝあぢいそとらよのせせひもあぢいそ
うあつて夜いふくはあぢいそとらよのせせひもあぢいそ
今も死かしのあぢいそとらよのせせひもあぢいそ
なんともあぢいそとらよのせせひもあぢいそ
日んごうゆふれもあぢいそとらよのせせひもあぢいそ
まもせせひもあぢいそとらよのせせひもあぢいそ
けいこくもあぢいそとらよのせせひもあぢいそ
大妻ありつりもあぢいそとらよのせせひもあぢいそ
りてあぢいそとらよのせせひもあぢいそ
せせひもあぢいそとらよのせせひもあぢいそ

うかづきくしづゆ流しけりかとあや
とめはあぢいそとらよのせせひもあぢいそ
んまのあぢいそとらよのせせひもあぢいそ
すくもあぢいそとらよのせせひもあぢいそ
まをゆみあぢいそとらよのせせひもあぢいそ
ぐあぢいそとらよのせせひもあぢいそ
かまあぢいそとらよのせせひもあぢいそ
てあぢいそとらよのせせひもあぢいそ
あぢいそとらよのせせひもあぢいそ
あぢいそとらよのせせひもあぢいそ
あぢいそとらよのせせひもあぢいそ
あぢいそとらよのせせひもあぢいそ

一き源氏乃武者きり派しき世をくりよるうた
目多し系北やどはくれくはつるの酒りよるきうり
いてまいりけふてしねどまはりしきて人かぢや
るし年あそく一入むりれうさかむり成ぬきけし酒
ものしりけふとど あらかし寛弘五年二月八日
うせきを終ふ世しり四十一

六十六代

はぎのえかど一糸院天皇とりきし沖いしれやと人あま
圓融院乃山門者一乃王子也此母皇太后宮詮子とりき
之太政大臣兼家北たむ乃者二の女ありと此みくど天元
三年庚辰六月一日兼家れおとむ乃東之系の家よを生

れと終終ふ東よまきとせ終ふるの永觀二年甲申八月
廿八日也沖兼五歲寛和二年丙戌六月廿三日位川之弟
終ふ沖兼七歲永祿二年庚寅正月五日沖元服此兼十
一と終ふるの世終ふるの廿六年己未八月十九日とあのみと
とうみもり終ふ東之系女院と是とす終ふの此母はの
兄兼系仲正乃むすめあり あらかし寛弘六年六月十二日ありとせ終ふ
同月の廿二日とせと終ふ世しり廿二

六十七代

川がたれんくどと糸院のえうとととと沖いしれいさどと
冷泉院者二の王子ありと沖母贈皇太后宮超子とり此太政
大臣兼家乃者一の女子ありと此のえうとと負觀九年丙子

正月二日生れきり終ふ寛和二年丙戌七月十六日東宮に
きり終ふおる一日元服ありて御茶十一寛弘八年辛亥
六月十三日位はつ終ふ御茶十一寛弘八年辛亥
事九年院より終ひて御茶十一寛弘八年辛亥
そいひ終ひて御茶十一寛弘八年辛亥
ゆいり終ひて御茶十一寛弘八年辛亥
のゆいり終ひて御茶十一寛弘八年辛亥
きり終ひて御茶十一寛弘八年辛亥
をぬらん終ひて御茶十一寛弘八年辛亥
ども終ひて御茶十一寛弘八年辛亥
并れぬの終ひて御茶十一寛弘八年辛亥

常れたあこころなごうはあこころなごう
おゆいり終ひて御茶十一寛弘八年辛亥
ども終ひて御茶十一寛弘八年辛亥
ゆいり終ひて御茶十一寛弘八年辛亥
をぬらん終ひて御茶十一寛弘八年辛亥
ども終ひて御茶十一寛弘八年辛亥
并れぬの終ひて御茶十一寛弘八年辛亥

かゝる一もくろひありかりしう屋ぞかゝるも成り
しきまはるもすこしはありはありづりし半よ
ささばいしや戸の天狗のしたるまの終るも
ましくもきこえんるうめれうげまきおのりも終る
りたきく佛の面よりひんぐりたもくはくもれり也
誰れもかりぬるはくしき終るもけり六八入道
殿よりいよくめをまのり終りあきす
いさうりしうおひかよたししゆしてよれ人い見
しうあひやめり終るはくしき終るもわくれも
くしはく終るひしていよるん見りうせ終るぬり
を思ひけぬくは終るむもせ終るもあやし

足奉りし物とく入道及おせられ

寛仁元年五月九日うせられ
終るは茶四十二

六十八代

はくはるもあ代いれありあれ一条天皇
の中二王子也は母いまの入道殿下道長乃中一乃也
す免あり皇太后宮彰子とくはく今もはくはく
はくもくおひし男ふ人のゆらんはくはくはく
はくもくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
一日土門殿もはくはくはくはくはくはくはくはく
日東宮もはくはくはくはくはくはくはくはくはく

九日辰よはるを珍ひし御祭九歳寛仁二年戊午正月
三日御元服の衆十一位よはるを珍ひして十年乙未
御祭ありむ今年万壽二年己丑とては申せ給ふ
とみづきとせしむらうとみえおぼくまのりく
おぼくゆへに御祭ありむとみえ今に入道殿下出衆せ
ま御祭のまじりよのおや一切衆生一子のとくも
おぼくまはまのにおおがしとみえ今に因白左大臣一
天下とまつりおぼくおぼくすくはるごのにおおがしと
内大臣よと左大将よけしおぼくおぼくひと東宮大夫中
宮權大夫中納言よとゆへくおぼくおぼくひと内
つとくおぼくひとゆへくおぼくおぼくひと

も今もおぼくおぼくひとゆへくおぼくおぼくひと
おぼくおぼくひとゆへくおぼくおぼくひと
一天下のまじりよのおや一切衆生一子のとくも
おぼくまはまのにおおがしとみえ今に因白左大臣一
天下とまつりおぼくおぼくすくはるごのにおおがしと
内大臣よと左大将よけしおぼくおぼくひと東宮大夫中
宮權大夫中納言よとゆへくおぼくおぼくひと内
つとくおぼくひとゆへくおぼくおぼくひと

ちりりうの本の祿を^生けしはけりひあひ
 てつきばしそちもあけあひそちをもむを
 やあうあまをまの帝王の汗つたれをばあつ
 きふ大臣のあつきいあひんありとくを
 いぬをねとこいぞくいしあひうめをさやあ
 羅のきづりだりあひうめをさふかぶえとけ
 あまもしく大臣のあひのあひをさう
 ちりひあひあまのあひあひあひあひあひ
 うんあちもするれあひあひあひあひあひ
 やあひくげあひあひあひあひあひあひ
 色あひあひあひあひあひあひあひあひあひ

見掛けあひあひあひあひあひあひあひ
 衆かあひあひあひあひあひあひあひ
 ああけうあひあひあひあひあひあひ
 ちあひあひあひあひあひあひあひ
 人くあひあひあひあひあひあひあひ
 ちあひあひあひあひあひあひあひ
 ちあひあひあひあひあひあひあひ
 ひあひあひあひあひあひあひあひ
 ひあひあひあひあひあひあひあひ
 けあひあひあひあひあひあひあひ

あひあひあひあひあひあひあひあひあひ

ふたつとてなほしゝもいふべし

やういふまじきよるぎいふくむしゝとあまいたび補
てうめきとせ

まへうさうのあまをほきくかたれなく

あつたよるむねゆりかゝんも

今やこれあふひやゆもなごころうらえうそんのまに
いきてふりむひもるふらうしほやそやうまて
しきうめけとるりやすすきとあやふふい
このこふりかゝんかひあつて人ふあつてかく
そあつたやどあつたかゝんしほいふまが
はくくもあやふらうきうらふけし

うくゆふあつたあまよのきよし

あまめゆりやあまのあつた

きこうめ幾たりふりかゝん

おび又おだらうがとくは日本紀日本とせ

むらりうらうしむ僧俗者小就就後後流流法法おやくうけ

りれとふくあつた事の子ふをゆくまね

りやしてむねあまのあまのあま

くあまんとあつたきあつたあま

きなるとあまのあまのあま

けいんせ中中あつたあつたあつた

に目もあつたあつたあつた

の中にきこい戸持入道殿下れありき海の内へを歩
いま紙ん侍りりも二河もかく又三河となくあ
びるくもりねくねくもひたくも一乗法のおく
しあありき海乃りもくもたきもり世るれ大政大
臣振政園向とやせとけけめをりりともめでと記事ハ
えねらうもまきぬるありと法文聖教のなりふとの終ふ
るりはうとのこおねれど海とのうととねり事は
かき一奄羅といふう一本あまごとのて紙むもふと
くくくわこもはとれた終くも天下大臣の御乃中
にふのありき君のこくうよふめつうかき一おとすめ
まとい戸持くすゑとを終乃人かばよりたいせん侍

とありかこに海の也や誰をの海とひらうとまきこ
しめせよよあふ事はあまのうとくいんめぐとまきこのこ
しと侍らんあまのうとくちやとまき何ともきう終りぬ
んくおよりすうむとあん思ひ侍りくくふめをたま
てくくちやとまきくはとまきあまの世けとまきてはち
大臣とれたくくくくこれと大臣大臣大臣大臣大臣
大臣と侍位天下とありあのまり終くふらまくとこれお
ゆえ侍りせけとまきて後まおのふまを大臣大臣三
十人右大臣廿七人内大臣十二人なり右大臣大臣いあ
の
出つ乃よふしたやすくはるせ終いざりきとありひひ
又とまきれれあがりのひと出つれ御とありぞならも終ふ

めかまゝなるにぞく帝王此世に居りおちるまじりして
仰ぐ一海人一海人^{海人}大官^{大官}納^納るすおやくたをいひて後
てのり贈太政大臣^{贈太政大臣}なり^{なり}なりと^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}
いそめりりさるるにそとひ七人^{七人}越^越げらるるやねすらん
日まよのた政大臣^{政大臣}いなりかそくすく^{すく}形^形ぞ^ぞね^ねる神武
天皇より二千七代りあり^{あり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}
きるるなりとの世代よりあり^{あり}び^び八省^{八省}百官^{百官}左右大臣^{左右大臣}
内大臣^{内大臣}なりけり^{なり}め^めなり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}
り^りま^まあり^{あり}右大臣^{右大臣}は^は蘇我^{蘇我}のやま^{やま}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}
これハ元明天皇^{元明天皇}此世^{此世}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}
位^位は^はなり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}

と^とり^り春^春宮^宮なり^{なり}あり^{あり}て^てあり^{あり}さ^さも^もなり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}
なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}
ト^トなり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}
よ^よあり^{あり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}
と^となり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}
なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}
天智天皇十年二月三日^{天智天皇十年二月三日}に^になり^{なり}
位^位は^はなり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}
う^うて^てなり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}
なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}
代^代よ^よあり^{あり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}なり^{なり}

子とありては天武天皇に王子ありは三人乃太政大臣
は御とて見らうと成さすといふ市王子大臣の御とて
御ひよりりちち太政大臣の御とては御とては御とて
ききき職負令りは太政大臣は御とては御とては御とて
御とては御とては御とては御とては御とては御とて
ありければ御とては御とては御とては御とては御とて
よありては御とては御とては御とては御とては御とて
元年とては御とては御とては御とては御とては御とて
九月とては御とては御とては御とては御とては御とて
とて太政大臣ありては御とては御とては御とては御とて
とて御とては御とては御とては御とては御とては御とて

今乃宗院大臣とて太政大臣十人は御とては御とては御とて
あれよりいふあち友皇子とて市此皇子とては御とては御とて
人乃太政大臣ありて太政大臣は御とては御とては御とて
のちとては御とては御とては御とては御とては御とて
大臣皇子とては御とては御とては御とては御とては御とて
のちとては御とては御とては御とては御とては御とて
あはれとては御とては御とては御とては御とては御とて
出家とては御とては御とては御とては御とては御とて
臣とては御とては御とては御とては御とては御とて
とては御とては御とては御とては御とては御とては御とて
御とては御とては御とては御とては御とては御とては御とて
御とては御とては御とては御とては御とては御とては御とて

うまはあまらうりてむのひよりいふまはせは
くもめかばうりてはむもあわもあはれ
うまのうまおねて海師かうかまあはり
てらあきれたま帝王のまも文徳乃中村より
くはまはるのうらわらうすそをたえを乃は
らのあうりたよりはあまうりたよの人
あまうりたよのあまのあまのあまのあま
その中にあまのあまのあまのあまのあま

文政十丁亥六月朔日写之

中村直道

大鏡卷之二目錄

臣家

冬嗣大臣

五条后の
ていあり

良房大臣

良相大臣

長良中納言

二条后の
ていあり

昭宣公

基經

時平大臣

基經太郎

右大臣冬嗣乃^{よかひつ}た^とは内膳^{うちぜん}れお^との^と廊下^{らうげ}も^とえ
十六年右の大臣れ^とう^と升^とえ^と六年^とま^とむ^と乃^と内膳^{うちぜん}れ^と
よ^とた^とう^と海^とと^とる^と乃^とゆ^とへ^と嘉祥^{かしょう}三年^と庚午^{こうし}七月七日贈^と
太政大臣^と乃^とり^と院^と院^と大臣^と乃^とは^との^とか^とは^と
お^との^とさ^との^とこ^と十^と八^とお^とう^とう^とと^と也^とれ^とが^とう^とう^と
し^とき^とを^とん^とご^とた^とり^とれ^とう^とい^とり^との^とま^とを^とと^とゆ^とう^とば^とあ^と
う^とた^とし^と乃^とえ^との^との^と沖^と母^と后^と贈^と太政大臣^と長^と良^と乃^とた^と
と^とを^と政^と大臣^と良^と房^とれ^とか^とう^と右^と大臣^と良^と相^との^とお^とう^とい
ひ^との^とゆ^とう^とか^とり

一太政大臣良房乃^とか^とう^とい^と右^と大臣^と冬^と嗣^と次^と郎^と乃^とり^と天安元

年丁丑二月十九日太政大臣よる日移ふ同年四月
十九日位正歳五十四日門のち西門北西縁のち海
那を天安二年八月廿七日位正移ふ同年戊寅
十一月七日攝政の詔あり年官年爵移り移ふ貞觀八
年丙戌岡白よりつり移ふ正歳五十三日移ひての西
か憲仁公とすつけまて海つふ又白川の大臣深教此大臣
とすはまきりたぐいおのち文徳天皇此おち
太皇太后明子此おち清和天皇此神祖又そ太政大臣
准之官位よのち廿三年官年爵の宣旨より移
政岡白より移ひて十五年丁未はれたるが御が
ありまよそ廿年大臣の位よそ廿五年ぞおちせ

は版そ版氏乃よりめそ太政大臣攝政一移ふめそたき
御あつた海よりよりあそけりてそふそそ
あまのゆりめか版のかわいさうちきみとはこの世事
あり移るふ中あそつり御ん移るめそそそ
してあがりそせんそけりて移むす免るめ版の
版の御まへり攝政版のかわいられらとあそそ
てかくよま世移つふそそ

やそ移るそよりひのかむぬあつたあれそ
版そ移るそよりひのかむぬあつたあれそ
川もたきああそよりひのかむぬあつたあれそ

は

ちれなみいありて世を流つる川を
きんがよまきこれおまきあつたれ

これ人ありしりたうりど物と申すやと世は
けぞゆふあつていふたきいひんが子たう海ぬ
しうくらあもましあつたのうら長良中納言れがこ
ろこれゆひらんありしりばるる流うおゆれん又
よらんまふのほりお思ひしけめどそれゆす忍しを
今よさくあつてまふのまをたくす忍ふよの卯に
海よりなまきりけありの飯

一右大臣良相の柩を流母白川此大臣あか冬嗣大臣
光五郎大臣の位より十一年贈正一位西三條大臣也
中に淨務定頼を由り此所をかく次子多堂又
て驗徳うりゆりゆふ人なりけ大臣乃は女流に万事
よくあつてゆむよりぞゆり乃おの時忠女流をあつた大
納言常約のよとやえしゆ子三人なせしと五位のて
典藥助えんがうのすけの殿頭とのんごうあつてゆひしゆとあつてゆひしゆと
ふくばりも急ゆ人ゆひける中納言友とやしくれ
せとつたてあえきをまつりゆりゆりせぬゆあやまのゆ
とこそおゆゆゆゆ

一贈太政大臣權中納言後二位左兵衛督長良の女嗣
のちこれ太郎はくを白川大臣西之条大臣よかかぐも
りて十二年陽成院沖と給ふお同ち小松とすらぐ松
一元慶元年丁酉正月に贈左大臣正一位又贈太
政大臣松犯大臣とすすひらひにたぐも西之条大臣
せしその中よ基經のおとぐすくれけり

一太政大臣基經のおとぐすは昔長中納言の弟よおとぐ
ひせとつひのちこれおむと免醍醐北河の后朱雀院
天皇よりひよ村よ二代の母后にたぐもはけり
この母贈右大臣總繼の女贈正一位大夫人乙春

陽成院位ははくせ給ひて後政宣有紙かりしう給ふれと
一享十一寛平御内仁和三年丁未十月廿一日周白よ
りてせ給ふ西条五十六と寛平三年正月十三日うせ給ひ
よきいひか昭宣とすす公卿よと女年大臣位のく
女年よとあつ後給ふり十よひんかとを御内く御内
よの人堀川の大臣とすは小松北河の母この後これ
けりかろよたぐも油之小虫の御内とあつて見え奉
りせ給ひてしよよあもとくきあつりくよたぐも油
を飯のちこれ君と見えたるものち後給ひらるり
よしゆさのちこれのちあつりよあつりいんこたり
あつりははくせ給ふりよとわつて後給ふらるり

もふ物もそのりきるぬいづ〜んきひ〜やの由あ
まよりお〜とがりま〜せんきる人見こつおもしくる
とらるる〜まひ〜せん〜やのおもしくる
うあ〜んおもしく〜あるはのあ〜とやと
うらひけをひひるおれた〜いせれありにげうら
よそよのきるよそえも〜せはふよみ〜くせさ
珍ふ物ふ〜いよ〜見せた〜く〜つ〜成院は陽
成院おり〜成院の〜い〜を〜と
君お〜やん〜か〜位は〜ん〜いふ〜とち
うに王流とま〜つ〜も〜ゆ〜い〜い
ま〜おの大臣王流の〜と〜り〜い〜

よそは〜れて位は〜い〜なるの〜や〜も
まはさ〜おの半〜お〜この大臣の〜い〜りて
小松の〜は位は〜い〜お〜り〜い〜の
とけ〜い〜り〜大臣の〜い〜り〜い〜
中〜い〜はち〜い〜お〜い〜い〜
ゆ〜い〜お〜い〜の〜い〜た〜ま
川はよ勝延僧都れよん〜い〜
う〜い〜と〜い〜
あ〜い〜い〜
この〜い〜い〜
い〜い〜い〜
のよ〜い〜い〜い〜い〜

古今の徳のいづれとぞぐぐか沖つて川院雨院と
よすも後流ひいとわり川院とよもりさくみれあり
らましくいれまごよせを後流ひ川院とよもりの
や又うと流人なるはまのくねまともるぐくむつ
を流も人なりと沖依はあつて歩てるく歩
流ふありもねままけかり川院地形の仔細
歩て流あり大饗のあり教もこれ軍のありやう
やまゝ昔者の軍の川よりむんぐよまてうは
んくくのひききげし流ひいばかごいあつらん
あこれらまては川よりゆたにくらるるを流を
尊者は沖車乃ゆりよふよふとゆかのみいふて
いふ

らぬ物とやと見えゆかふ小のあり流ありを
まのてとくめまはうに所よと流たゆらある中
まは冷泉院のこも思ひありひのまのそ
りなるまのいゆまのゆまのいこまうとくめれあ
照宣云のたよは陽成天皇のゆありよと字あは
乃四時唯之官位して年官年爵とえゆふ未流院
むまひくかののありてたろまよおありや
むまか〜とせむをありやゆかのこくは人た
く〜を流を流は年次初を大官仲年官初太政
大臣忠平やのふ〜とまげきかあり流〜
なりてまげ〜ゆた人か〜かうの〜とるれ

思ふ4しむらふも思ふとほりしと

くあいまそふうなうえし那

又そのの國はたしついでありつじやうやふ

おちよやうやうやうのほひくじよやのいんう

思ふはさしとゆんしほくしめはくか詩

いんうか

騎長無驚時變改 一榮一落是春秋

はくしよんしゆはくしよんしゆはくしよんしゆ

かかきくゆくしゆしゆしゆしゆしゆしゆ

以流し

夕はきははるるるるるるるるるるるる

あはるるるるるるるるるるるるるる

又雲うらやましよふあはるるるるるる

おちよれしゆくおちよれしゆくおちよれ

しゆくおちよれしゆくおちよれしゆく

はくしよんしゆはくしよんしゆはくしよんしゆ

あはるる

うえるるるるるるるるるるるるるる

あはるるるるるるるるるるるるるる

あはるるるるるるるるるるるるるる

あはるるるるるるるるるるるるるる

あはるるるるるるるるるるるるるる

ちと松きくひのめさうかよゆ〜
 いまふくえんくく人のせあや〜
 ろとまののせり物ゆ〜
 り〜わりてりめせん〜
 せ〜く〜物と〜
 せ〜た〜
 う〜わり〜
 うて〜
 櫓の〜
 ち〜
 かひの〜

都府樓總者凡色 觀音寺只聽鐘聲

是まは文集白居易遺愛寺鐘歌枕聽香爐峯雪
 撥簾看とつふ訪よもま〜
 ンせむ〜
 九月九日菊た〜
 花〜
 あり〜
 う〜
 は〜
 どその〜

去年今夜侍清涼 秋思詩篇獨斷腸

恩賜御衣今在此 捧持毎日拜餘香

おの詩いかにこく人くかえりてきこの事
いかにまじりつりしころもあはれに
はらりあつちつたひて後集あつけらう
ちりきいそかりよつぎがわつりつり
のせめてあはれなからん
きり入えがうらつり
のほかに

あれをよみしつらも
かまの人をちふ
のちる日うつりあつて

あめれ
いかに

らのおとあま
あま
あま
あま
あま
あま
あま
あま

ておるやもより別當^{ひつ}本司^{ほんし}おどなきせ給ひていと御ん
下^かね^ねの^の裏^{うら}屋^やけく多^{おほ}び^ひけ^けの^のめ^め給^給ひ^ひも
圓融院^{えんやう}の^の由^{よし}き^きれ^れる^るなり^{なり}なく^{なく}え^えと^とう^うの^のい^いの^の成^{なり}
い^いう^うか^かり^りの^のい^いれ^れた^たく^くま^まの^のお^おつ^つ又^{また}の^のあ^あた^たま^ま
ま^まの^のり^りと^とま^まの^のふ^ふま^まの^のい^いれ^れの^のい^いは^は物^{もの}の^のす^すけ^けて^てま^ま
ね^ねと^とう^うの^のあ^あり^りた^たは^はの^のの^のり^りと^とま^まの^のふ^ふよ^よの^の
う^うち^ちお^おび^びの^のい^いれ^れた^たく^くま^まの^のい^いは^はく^くを^を
又^{また}と^とや^やお^おん^んま^まの^のい^いれ^れた^たく^くま^まの^のい^いは^はく^くを^を
と^とう^うを^をあ^あり^りけ^けし^しう^うれ^れと^との^のお^おど^どり^りの^のい^いれ^れた^たく^くま^ま
と^とう^うは^はや^やり^りの^のい^いれ^れた^たく^くま^まの^のい^いは^はく^くを^を
として延喜三年^{えんぎさん}の^の丙^{ひの}子^すの^の亥^{がい}二月^{にふ}二十五^{にじゅうご}日^{にち}より世給ひ

しそ^しう^うの^の御^み衆^{しゆ}五^ご十九^{じゅう}り^りて^て後^{のち}に^に大^{だい}后^{ごう}の^の御^み衆^{しゆ}の^の延^{えん}
喜^き九^く年^{ねん}己^ひ巳^し月^{げつ}四^し日^{にち}う^うせ給^{たま}ふ^ふ
位^いと^と十^{じゅう}年^{ねん}ぞ^ぞお^おと^とけ^ける^る本^{ほん}院^{いん}大^{だい}臣^{しん}と^とし^しの^の時^{とき}年^{ねん}の^の
お^おと^とれ^れむ^むす^すあ^あの^の女^{むすめ}御^み衆^{しゆ}と^とう^うせ給^{たま}ひ^ひぬ^ぬ御^み衆^{しゆ}の^の東^{とう}言^{ごん}と^と一^{いち}男^{なん}
公^{こう}衆^{しゆ}大^{だい}將^{しやう}保^ほ忠^{ちゆう}と^とう^う世^せ給^{たま}ひ^ひよ^よと^とか^かし^しに^に女^{むすめ}御^み衆^{しゆ}と^とう^うせ給^{たま}ひ^ひぬ^ぬ
と^とう^うの^のい^いれ^れた^たく^くま^まの^のい^いは^はく^くを^を
お^おど^どれ^れん^ん冬^{ふゆ}は^はま^まの^のい^いれ^れた^たく^くま^まの^のい^いは^はく^くを^を
ち^ちい^いさ^さた^たと^とう^うの^のい^いれ^れた^たく^くま^まの^のい^いは^はく^くを^を
よ^よあ^あと^とと^とう^うの^のい^いれ^れた^たく^くま^まの^のい^いは^はく^くを^を
ひ^ひろ^ろの^のい^いれ^れた^たく^くま^まの^のい^いは^はく^くを^を
ひ^ひろ^ろの^のい^いれ^れた^たく^くま^まの^のい^いは^はく^くを^を

うらうらよよとてさうして人なりひかれこそ
くくくははははとてあまのなほさうとてさうひびき
てさうとてさうとてさうとてさうとてさうとてさう
さやうゆらゆらかきさうとてさうとてさうとてさう
将とうらあげあふたれとてさうとてさうとてさう
りさうとてさうとてさうとてさうとてさうとてさう
とさうとてさうとてさうとてさうとてさうとてさう
さうとてさうとてさうとてさうとてさうとてさう
あさうとてさうとてさうとてさうとてさうとてさう
忠中納言もうせさうとてさうとてさうとてさう
法のみちもとさうとてさうとてさうとてさうとてさう

びおどめるありは傳雅三位のちとてさうとてさう
まぬ時さうとてさうとてさうとてさうとてさう
てさうとてさうとてさうとてさうとてさうとてさう
ま教忠中納言のいささうとてさうとてさうとてさう
かかぬけとてさうとてさうとてさうとてさうとてさう
ものさうとてさうとてさうとてさうとてさうとてさう
よえやすとてさうとてさうとてさうとてさうとてさう
かさうとてさうとてさうとてさうとてさうとてさう
すさうとてさうとてさうとてさうとてさうとてさう
きさうとてさうとてさうとてさうとてさうとてさう
ささうとてさうとてさうとてさうとてさうとてさう

見ゆふ大捕のん愛もんまふとやて送つてゆか
とれたるまをもくゆえつとむ君らこい
夢りしこふんぬまれううのー哉
以必事大捕

あーはななくさむくもあつたりさ
ゆめれうらりも夢んこいーかこ

玄上の宰相のむとあやその後朝の役は教志中納言
少将そくし終ひたるあうせゆひのりは中納言に
あひはまふとらうらるる思ひあがらうと見終ひ
もん文範乃氏終ひるりまものうえそて教のまひ
よそさあうらうくとまれ八命みどり記そんありうら

らげふかんまき後君はひ文範まめひ終りんと
のゆひたるとあつゆとさうとつと終ひたれとあま
たりてきえむよふたぐと終りあぶのゆひかうら
こまあくとすうらうらうらと君をりは中
よは大納言源平卿也女乃も終願志おとのえ終
有る居まぐわり終ひふその位も六年おとせ
とすこーめあやあやめりせんあつあつと終ひ
あつのうらうとま大納言の作法とゆめひ終ひは
あつあつと終ひたつたつと終ひたつたつと
もあつあつと終ひたつたつと終ひたつたつと
うづとあつあつと終ひたつたつと終ひたつたつと

はあつまゝせしむるに
どうれはたゞりしや
まのうらみもあはれ
まのうらみもあはれ
まのうらみもあはれ

天政十丁 天保六月五日字之

中村直衛

